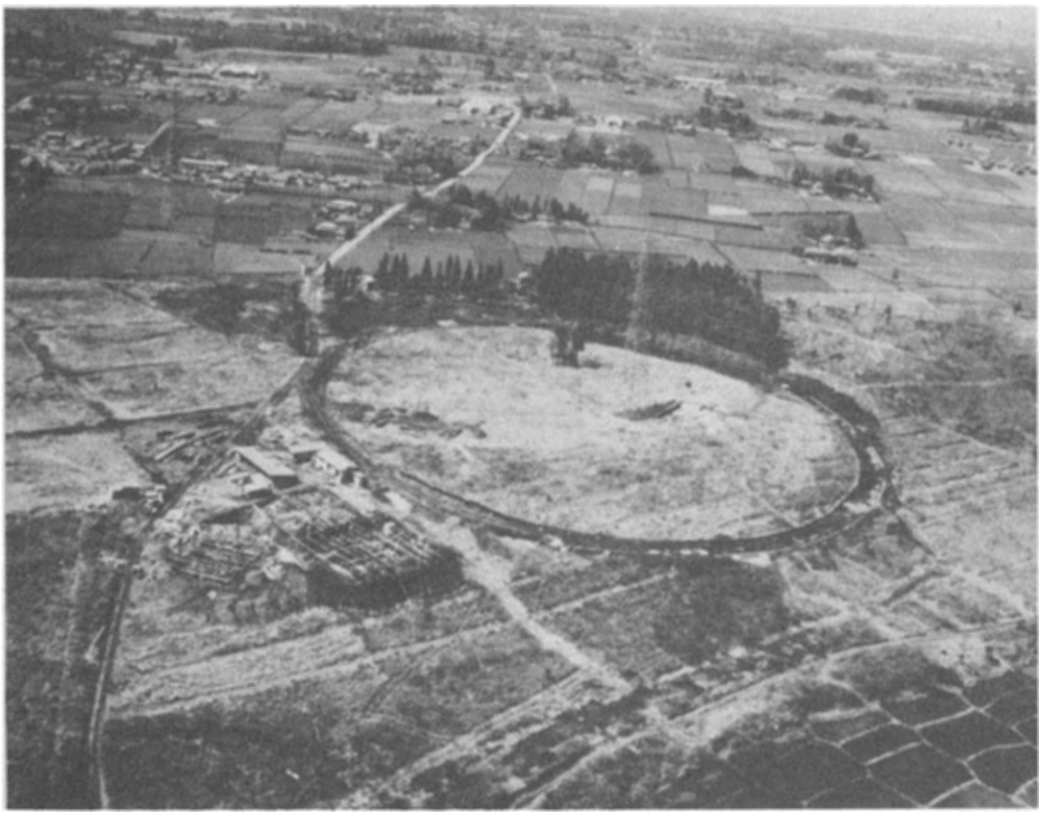
貝塚博物館紀要

創　刊　号

昭和41年度



建設中の加曽利貝塚博物館（1965年11月）

1968年３月

千葉市加曽利貝塚博物館

貝塚博物館紀要　創刊号（昭和41年度）

目　　次

「貝塚博物館」の開館 …… 1

〔特別寄稿〕

加曽利貝塚博物館に望む　鈴木正夫 …… 2

加曽利の博物館　滝口宏 …… 4

加曽利貝塚博物館への期待とあり方　清水潤三 …… 6

加曽利貝塚の意義と保存対策　武田宗久 …… 8

世界的史跡を守る——「守る会」と「友の会」について　上野豪彦 …… 14

〔調査概報〕

千葉市加曽利町兼坂古墳発掘調査概報　後藤和民 …… 17

千葉市加曽利町新山古墳群発掘調査概報　後藤和民 …… 27

〔研究論文〕

縄文時代集落考（Ⅰ）　後藤和民 …… 41

〔編集後記〕

巻　頭　言

千葉市加曽利貝塚博物館は、加曽利貝塚を中心とする縄文時代の貝塚を伴う集落に関する歴史科学博物館として発足した。その期待は大きく、その任務は重い。

博物館は元来、研究機関であると同時に教育機関という二重性格を帯びている。この点、大学と類似しており、実際に、大学などの研究機関と密接な連繋なくしては、その実質的な活動をおこなうことはできない。

中には、社会教育法などに基づき、博物館は社会教育機関だからといって、その教育機能のみを強調する傾向がある。また、教育機関というと、その教育すべき内容は、他の研究機関における成果のうち、ほぼ普遍化した「定説」を導入し、それを解説し伝授する場所だという認識が意外に多い。これらは本質的な誤解である。

これは、小・中学校における義務教育や高等学校における基礎教育など、学校教育を中心とした狭遍な認識である。一般の社会人が現実の生活体験を通じて、その中から把握した自主的な問題意識や学習意欲に対して、なんらかの指針や解決を与えるためには、そのような既成の常識や定説だけでは到底不可能である。そこには、当然のことながら、博物館と利用者との密接な対話が必要となり、それによって、常に創造的・前進的な調査・研究が要請されるはずなのである。

もともと博物館とは、利用者の自主的な学習の場、創造的な調査・研究の場である。博物館は、常に利用者の問題意識を感受し、同時代人の共通の問題として受け止め、むしろそれを先取りするような先導的役割を果すべきである。すなわち、博物館は利用者との共同学習、共同研究の場なのである。

したがって、研究なきところに教育などありえない。博物館で実質的な教育効果を挙げるためには、当然、博物館独自の積極的な調査・研究が必要となる。それが、博物館における教育内容を豊富にすると同時に、その内容に対する確実性と責任性を確保することになるのである。すなわち、博物館における研究成果を展示に反映すると同時に、その根拠を明示し、その正当性を世に問い、大方の叱正や教示を得るためにこそ、この「紀要」を公刊するものである。

編集後記　－学芸員の開館準備メモから－

◇　昭和40年8月から、千葉市社会センターの一室に「加曽利貝塚博物館準備室」を開設。明治大学大学院に在籍中の後藤和民が学芸員として、その準備業務を担当。41年4月に新採用の中山仁君が配属されるまで、大塚喜一係長と2人だけ。

◇　昭和40年10月から41年7月にかけて、加曽利北貝塚の野外施設建設のため、加曽利貝塚調査団が予備発掘を開始。その器材・器具・消耗品の調達から、人夫の動員、調査員の宿舎、弁当、茶菓の手配、現地の調査指導、夜のミーティングにも参加。交替でやってくる新手の後輩たちを一身で受け止め、毎回コンパにつき合うのも楽じゃない。

◇　昭和40年11月、加曽利北貝塚の公園整備がはじまり、その遊歩道路を削平中、貝層部の一部が露出し、遺物が散乱する。早速明治大学の学生・小池公子嬢と数人の人夫によって遺物を採集する。同時に博物館の建設工事もはじまり、基盤の削平中人骨が散乱するやら住居址が露呈するやら。

◇　昭和40年も暮れかけて、加曽利南貝塚の買収の件で、土地所有者の東洋プレハブ工業KKとの交渉がはじまる。東京に出張すること数回。文部省から坪井清足・岡田茂弘両技官が現地に来訪すること再三。そのたびに随行するのをみて、「こんなことしていて修士論文が書けるのか」と坪井技官。「そうだった」と気がついたのが12月25日。早速休暇届を出し、以来連日の徹夜。41年1月12日までに「原始集落考序説」200枚を書き上げた。

◇　昭和41年4月、加曽利町字兼坂で、鶏舎の拡張のためブルトーザーで削平中、組合式箱形石棺が露出。蓋石1枚が落ちてぽっかり口が開く。中をのぞいたら赤く染った人骨がびっしり。驚ろいた地主が県に通報、社会教育課の平野元三郎氏から、「人骨だけ取り上げて、博物館に展示したらどうだね」。早速とんで行ってみると、それでは勿体ない状態。遠藤健郎課長に交渉して、正式な発掘調査を申請。5月1日から緊急調査を実施。

◇　一方、千葉高校の武田宗久教諭が、坂月ニュータウン建設のため、蕨立貝塚の緊急発掘中。われわれも日曜ごとに応援に駈けつける。ところがすぐ横にある「さら坊貝塚」には手がとどかず、未調査のままブルトーザーが削平中。至るところに住居址の落ち込みがあり　蕨立貝塚と違って、点在貝塚を伴わないものがあり、大いに注目する。

◇　そんな中に、1基の墓拡状ピットがあり、人骨が露出しているのを発見。ブルトーザーを止めて貰って、明治大学の学生数名で徹夜で掘り、パラフィンで固め、遠路をリヤカーで運ぶ。社会センターに着いたのが9時。大塚係長が地下のグリルでおごって呉れた朝食の味が忘れられない。

◇　展示資料借用のため、各地を駈けづり廻る。釣針やヤスなどの骨角器、土偶や石棒の完形品、石槍やスクレーパー、ほしいものはどこでも不足がち。大学や博物館がムリなら、個人のコレクションを当れ。コネを頼りに東奔西走。玄関先で平身低頭。桐の箱から取り出す手が震える。ものを借りるとは、こんなにも心身が疲れるものか。帰って来れば、徹夜でパネルの原稿書き、管理室の林忠男さんのフトンにもぐりこむ毎日でした。

◇　この開館準備には、多方面の大勢の方々の御指導や御協力を頂いた。とくに明大の学生諸君がどれほど勤労奉仕をして呉れたことが、ここに厚く感謝の意を表し、今後ともよろしく。（後藤）

貝塚博物館紀要　創刊号（昭和41年度）

昭和43年3月25日　印刷
昭和43年3月31日　発行

編集・発行　千葉市桜木町163番地　TEL（0472）31—0129
千葉市加曽利貝塚博物館
印刷所　千葉市亥鼻2丁目10番10号　TEL（0472）27—4391
株式会社　多田印刷